熊本大学教育学部紀要
第67号, 245－250, 2018

高度経済成長期における農家女性による生活記録の意味

―「生活」を「書く」ということをめぐって―

増　田　　仁

The significance of life records written by rural women during the high growth period in Japan:

Thinking about their writings

Megumi Masuda

（Received September 28, 2018）

As rural women wrote and read life records during high growth period in Japan, they thought their life and community. As a result they tried to change the custom. It is a significance of life records. They wrote it during busy farmwork and housework. Intellectuals took an important role. But rural women made new community through life records and they changed their consciousness and the community.

Key words : life records・rural women・high growth period in Japan

1. 問題設定

本稿は，高度経済成長期における，九州の生活綴り方運動，生活改良普及事業における農村女性による生活記録等のサークル活動に焦点を当てながら，農村女性が意思疎通をしあい，創造的な活動に従事することの意味を分析する．「学習」を通して得た，生活を客観視し，変革しようとする力が現実の封建的な農村社会と齟齬をきたしつつも，農村女性たちを結びつけ，地域社会にどのような変容をもたらしていったのかを主に文書資料から跡付けていく．生活記録とは当該期の家庭における現状を家事労働者の視点から書いたものであるが，出版という性格上，編集者の意図や書かれなかった内容も多数含まれると考えられる．そのためフィクションではないがノンフィクションでもないという性格を持ちつつ，生活記録は書き手と大勢の読み手からなる共同体を形成し，社会変革への可能性すらも内包していたのである．また，生活記録は，様々な労働者の空間を超えた連帯（の可能性）であり，「労働」の合間の連帯（の可能性）であった．特に当該期の農村においては自主的な集まり自体が危険視される傾向にあり，だからこそ生活記録には空間を超えてつながる可能性を秘めた貴重な媒体であった．書くという孤独な営みの中からネットワークを模索する試みが生活記録だったのである．セルトー（1980＝1987）がいうところの，痕跡を残さない者たちが，形を変えつつも何らかの形で痕跡を残そうと試みた実践であると考えられる．「言う」ではなく「書く」ということにこの活動の重要性があったのである．

本稿は，主に九州の農村を対象とし，女性たちの生活 / 労働における格差（経済格差や地域間格差，嫁と姑の格差）を視野に入れながら，孤独な家事労働，封建的な家，弱い嫁の立場，言葉を持たない（発することのできない）女性たちが分断を乗り越え，農村で生き延びる糧となったネットワークを浮き彫りにしていく．さらに高度経済成長期後半以降，農業や家事労働が機械化し，女性たちの多くが賃労働に従事するようになる中で，生活記録はどのように変容しつつも彼女たちの生活に影響を及ぼしていくのか，データから明らかにする．

「教育とジェンダー」といわれる研究分野において，性差や階層に不関与と見なされてきた学校がジェンダーの視点から再検討されてきた（天野・木村 2003）．たとえば「隠れたカリキュラム」概念を実証していくなどの成果が見られたが，その一方で，学校内部や教科内部，若者に研究対象が限定される傾向にあった．本研究では，農村の女性たちによって展開された生活記録運動に焦点を当てることで，制度化された学校以外の場での成人女性による自己教育実践の内実を明らかにしていく．この作業は「教育とジェンダー」といわれる分野のすそ

野を広げることにつながろう．

さらに本稿は，生活と労働と学習を結びつける視点をもたらすことで，社会教育や生涯学習が戦後日本社会において果たしてきたことを再考する．家政学や労働社会学や教育学等の知見を援用しつつその垣根を取り払い，農村女性の生活実態に迫る点に特色がある．高度経済成長期の農村女性たちのサークル活動を分析することは，戦後史論を民衆史やジェンダー史の視点から再検討することになろう．具体的には，生活記録を通して農村女性たちが「主婦」や「母親」の視点を超え「私」が書くという意識に到達していくことは，第二波フェミニズムの契機の一つと捉えることも可能であろう．

本研究は，戦後日本の農村で展開したサークル活動を参加した女性たちの視点から捉える点に特色がある．この作業は，家政学・ジェンダー論・農村社会学・家族社会学・教育社会学がもたらしてきた知見を，教員や生活改良普及員・編集者・研究者といった指導的立場の人間からではなく，農村に生きる女性の視点から再考察することにつながるであろう．また，立身出世主義の対抗概念として出てきた郷土主義とは，特に女性にとって何を意味したのかを問うことで，独学の復権や学びあうことを通したネットワーク形成等，近代に成立した学歴社会が過小評価しがちだったものを掬いあげる作業を行う．戦争や経済的理由で高い学歴を獲得できなかった者たちのネットワーク形成過程の分析を行い，高度経済成長期に農村において生活と労働と教育の再編が進む中で，女性たちがどのようにネットワークを形成し，維持し，生活を変えようとしていったのかを実証していく点に独創性がある．

2. 農村女性による生活記録の成り立ち―編者の意図を中心に―

「生活」という言葉の意味や意図は時代によって異なってきた．この言葉の時代的背景をみてみよう．もっともひろく使われたのは敗戦後から 1950 年代のことである（大門 2012 p.171）．大門は自ら整理した表の中で，1950 年代から 60 年代前半において，「生活」がもっとも広く議論され，「生活」の運動が多様におきた時代，「生活」と主体形成・国民形成が明確な時代と述べている（大門 2012 p.172）．生活記録運動の隆盛もこの時代に位置付けられている（大門 2012 p.172）．

本稿が取り上げる資料は，雑誌『家の光』，農協婦人部，公民館長，丸岡秀子をはじめとする農村女性研究者等によって編集発行された生活記録であり，これらを中心に分析していく．

丸岡によるあとがきには編者の意図が記されている．

「本書の刊行にあたり，これらの記録が，たくさんの読者の方々のこころに，さまざまな問題や，共感や，苦難に立ちむかう勇気を投げかけてくれることを期待してやみません」（丸岡 1967 p.228）

生活記録を刊行することで，肉体的・精神的な重労働や封建的な家といった農村の問題提起，家ごとに分断されがちな農家女性の連帯，様々な生活上の困難の打破を意図していたことが分かる．

「母の生活文集は，それ自身に意味があるばかりでなく，それを通して，自分と自分の生活をきびしくみつめ，たしかめ，そこから“変わっていく”自分や，生活を期待することであった．」（丸岡 1958 p.8）

「日記や自伝や小説のそれぞれの要素をもちながら，しかも母の生活記録は，それらのどれでもない．/ それはあくまでみんなといっしょの行動のなかだちとして“変わっていく”契機をつみあげるための方法ではなかろうか．…/ 表現しなければ，共通のものをたしかめることはできないから，その技術は高められなくてはならないけれど，しかし，生活記録の場は，作文技術を競い合う場ではないと思う．生活の中で問題をつかみ，それをどう認識していくのか，それをどう行動で解決しようとしていくか，そういう状況をおたがいに交し合うことが問題なのではなかろうか．/…生活記録は，そういう個人的なところからぬけ出るきっかけを，たえずつくり出すということで，もう一つの意味をもっているものではなかろうか．」（丸岡 1958 p.10）（下線は増田）（ / は改行）

個人の生活を変えていく媒体であり，集団の生活を変えるよう社会に働きかけていく媒体でもあると丸山は位

置づけているのである.

「貧しければ貧しいなりに，悩んでいればそれなりに，毎日の生活のひだにたまる思いを書き合う中で，慰められ，はげまされ，そして喜びも悩みも，期待も，自分だけのものではなく「みんな同じなのだ」という共感から出発して，共同の行動をととのえてゆく.」（丸岡）（下線は増田）

共同で行動することの基盤をととのえることに丸岡は生活記録の意味を見出している．当該期の農村では自主的に集まること自体が危険視されることも考えられ，集まらなくともネットワーク形成ができる生活記録に指導者たちは農村変革の可能性を見出していたのである.

協同組合短大教授の美土路達雄は次のように述べている.

「…世の中と自分のむすびつきを組織運動のなかで，仲間とたしかめあい，なかから闘いとっていくところにまで高められなければ，しっかりしたものにならないのではないでしょうか.」（1965 p.107）

公民館長で生活記録を指導した及川は次のように述べる.

「…人と人とのつながりをほんとうの心で結べない社会では，口さきのありきたりの言葉で，つきあいを上手にごまかそうとするよりほかはないでしょう．こうした社会における人間関係の白々しさに較べたら，家庭における家族関係のいさかいは，むしろ人間性を刺激してくれるのではないでしょうか．悩みの中からこそほんとうの人間性がよみがえってくる可能性があると言えないでしょうか.」（及川 1963 pp.1-2）（下線は増田）

家庭の人間関係に焦点を当てることの意義として，家庭でこそ人間の本来の姿が現れるからであると述べている.

「農村婦人は変わった．自主的になった．ものを考えるようになった．生産人としての自覚をもって行動するようになったと，最近多くの人々がその進歩ぶりをほめています．しかし，農家の婦人達は，自主的になろうとすれば，夫や姑と言い争ったりしなければならないこともあるし，考えれば考えるほど世の中のりくつがめんどうになるし，行動すれば，よけいにつけ悪いにつけ世間から何か言われそうで心配だし，いっそのことよけいなことはしゃべらないで，考えないでいたほうがよいと思っている婦人が果たして少なくなったでしょうか．婦人達は，こうして生活記録を綴ったり，婦人会でのさまざまの学習をくりかえしてきたので，だんだん自分達のくらしの矛盾に気づきはじめてきたけれども，その矛盾にいつまでも対決してみたときに結局は，口をつぐんでしまったり，考えてどうにもならないとさえ思うことだってしばしばあるのです.」（及川 1963 pp.88-89）（下線は増田）

生活に対する理解を深めることと生活を変えることの距離の大きさが指摘され，生活を書くことを通した社会変革の困難が記述されている.

大牟羅によるあとがきによれば

「「文集が出てから嫁たちが生意気になった」…と及川さんに矛先が向いて来, はては“婦人文集”ではなく“悪口文集”だと呼ばれもしたとのことです.」（及川 1963 pp.156）

生活記録を書くことによって人間関係における葛藤が増大する．生活を比較することを通して，書く女性たちひいては読む女性たちが変わっていく．家事労働者である女性たちが従順ではなくなっていくと見なされるようになり，周囲から期待される「主婦」「母親」役割から脱し「私」へと主体の変容を遂げていくのである.

3. 生活現場を「書く」ということ―農村における現実と可能性―

生活記録を書く者の特徴はどのようなものだったのだろうか.

「農家の主婦といっても，根っからの農家出身者ではなく，都市や非農家から嫁いだ主婦たちの記録が，かなりあるということである．それも終戦後, 農家にはいった若い, また中年の主婦たちの奮闘記録が多くみられる.」（丸岡 1967 pp.4-5）

農家出身者でないからこそ, 農家の「労働」を客観視できる立場にあり, 現状を書きとめようという意欲を持っている．敗戦後の疲弊した農村での厳しい農作業を耐えぬいた主に非農家出身の女性たちの記録であることが分かる．彼女たちが執筆に向かった動機が以下の文章から推測される.

「荒くれ節くれた指でも，本を綴る喜び，記帳のペンをとる指であることを知ってほしい」（丸岡 1967 p.5）

農業だけではなく読書や文筆活動にも従事していることへの誇りや喜びを他者に知らしめたい思いが，農村の女性たちを生活記録に駆り立てていたのである．ここには農村の変革を目標に掲げる指導者とは，出発点においてずれが見出される.

「思い返せば，戦時中から終戦後までころんでは起き，ころんでは立ち上がりして，一家五人が，よくも生きぬいてきたものだと思います．わたしはこの戦争によって，尊い体験と，生きがいを身につけることができました．わたしは，根性と執念でここまで来ました．この体験と努力することを知らなかったら，わたしの一生は，つまらない，平凡な生涯だったと思います.」（1967 pp.208-209）

「最初に多少感じていた家族との性格的な違和感や，生活の慣習面での違和感が，だんだん大きくなって，わたしの気持ちを押えつけるようになりました．心をなにに向けようもなく，虚無的な，孤独な気持に耐えながらも，心とはうらはらに，毎日の労働に献身しなければならないのです．しまいには，そんなわたしの立場に，はげしい嫌悪さえ覚えるようになりました.」（1967 pp.216-217）

家庭内での葛藤の吐露が行われている.

「嫁の顔から笑いが失われ, いつしか姑の顔色ばかりうかがって生活するようになっておりました．嫁は他人で，あとはわしの子，と，いつの場合でもその頭がはたらく姑.」（山口県女性）（丸岡 1969 p.117）

しかし，生活改善クラブの発足により生活の共同化が進み，嫁たちは地域へも目を向けていく.

「まず料理講習会を手始めに，住宅改善，特に台所改善，便所，さては子ども部屋の改善と，クラブ活動がひろがっていきました．それらの経費捻出に頼母子講も始めてみました．家計簿記帳に必要な黒板共同製作も，楽しいことの一つでした．今も便利に使用しています．料理講習は，栄養の勉強にともなって家庭菜園づくりにまでひろがり，有色野菜の栽培，カンランの周年栽培，苗仕立など，共同でおこなわれました．その頃食膳にのぼるものは，ほとんど自家菜園で間に合ったものです．農繁期前に，保存食を共同で作り，喜ばれました．年よりも油料理をあまりきらわないようになりました．良質蛋白には牛肉をというので，共同購入で月二回配給したこともありました．その他，作業着の研究もいたしましたし，一日の健康はまず布団干しの励行からと，夜具地，白布などの共同購入もしてみました．いずれも年間計画・月計画とこまかい注意をもって事に当たり，わたしはリーダーとしてみなさんと一緒に歩きました.」（山口県女性）（丸岡 1969 pp.118-119）

「農休日も月二回ときめられ，文化的な催しも年々活発になってきました.」（家の光協会 1967 pp.219）

「農村の生活はとかく自己本位で，小さくまとまろうとする傾向があるけれども，協同の力を借りなければ，なにひとつとしてりっぱな仕事ができないことを痛感しています.」（家の光協会 1967 pp.219）（下線は増田）

「協同の力」の一端が農繁期託児所の実施であった．農繁期託児所は，子育てを中心的に担う女性たちにとって特に農作業が忙しい時期の家事労働の軽減につながった．以下は農繁期託児所についての記述である．

「託児所開設以前の田植え時をふりかえってみますと，肉体的疲労にもまして，精神的にも大変な重荷でございましたために，ともすれば子供達の世話も留守になりがちて心ばかりいら立っておりましたが，今では全く救われております．…子供達もお弁当を持って，さっぱりとした洋服を着替えて嬉しそうに出かけていく顔！一日一日共同生活に馴れていく頼もしさ.」（佐賀県農家女性 1965 p.100）

家に閉じこもりがちな日々から，グループ活動に参加するようになり，農家の嫁達は家庭内の人間関係についても話し合うようになる．

「嫁と姑のことは，一人わたしだけの問題ではありませんでした．広くみんなの大なり小なりの悩みでした．あるときは十五日会で「腹がたつ」ということをテーマにし，どんな時に腹が立つかを毎日記入して見ることにしました．一ヵ月経ってその経過を発表しあってみました．案外に姑さんが悪いのではなくて，自分がいらいらした気持で受けとっていたこと，あるいは主人にむかってとやかくやかましくいっていたことに気づいたので，三度に一度は黙ってこらえるようにしたという発表．子どもの言い分を十分にきいてやらないで，親の主張ばかりしており，子どもが言うことを聞かぬといって腹をたてていたという発表．広い方面にわたっての意見が出されました．多忙な主婦は，自分の本心にたちかえるのを忘れて，あまりにも周囲のことに気を使いすぎ，自分でいらいらするのでしょう．/ こんなわかりきったような事も，口でいうだけでなくペンで記してみると，大きな効果があるものです．会を重ねるたびに，皆の心が打ちとけて，とかく淋しい存在の嫁も，グループ員の交流によって，真剣に自分のことも裸になって話せる空気が出てきて，一同笑いこけました.」（山口県女性）（丸岡 1969 pp.119-120）（ / は改行）

地域内でのネットワークが構築される過程で，嫁達は自らの感情を書き・発表し合い，家族関係の改善を模索し始めたのである．

貧困は当該期の農村の大きな課題であった．

「「うち，あっちの学校で一番になったん.」というと…優等賞や通信簿をひろげて見せた．そうして「うち，高等学校に行ってもええん？」と心配そうに聞く東亜子に「行かにゃ.」と短く答えると，私はその成績に対して，子供の満足するような労いの言葉も，暖かい激励の言葉もかけることを忘れて，今後もなお続いて行くであろう苦しい家計を思い患った．/ バスの切符を買いに行くという私に，「母ちゃん，小銭は持っとるけ.」と云うと…この子はこんなにも母の家計を心配して帰ってきたのだろうか.」（熊本県の女性）（丸岡 1967 p.67）（ / は改行）

成績優秀な子どもをほめるより，上級学校に行くことで家計が逼迫することを憂いている母親の様子．子どもの家計への気遣いをすまない思いで受け止めている．母という視点から困窮する生活を見つめる文章を書いている．つぶやきともいえる記述ではあるが，指導者の「意図せざる結果」として，貧困という境遇への多くの読者からの共感が得られたと考えられる．

「農家では，ともすればこうした話し合いの学習に出る事が，如何にも仕事ぎらいの怠け者のひまつぶしのように本人も思い，又，周囲からも見られがちですが，その頭をまづ切り替えるよう何時も会長さんから教えられています．そして，このような学習が労働時間と同じに評価される日が一日も早く来るよう頑張らねばならぬと思っています.」（佐賀県農家女性 1965 p.98）

話し合いや読書，書くことを「ひまつぶし」としか見なさない世間に対して，話し合いや情報交換を生産労働と同等の意義を見出す視点が出されている．手足のように働くことが嫁の役割という既成概念をひっくり返して

いる．話し合いの場を設けること･そこに参加すること自体が生活を客観視するための新しい試みであり,「自分」という視座を獲得する契機になる．また，生活改良普及事業が行った家計簿つけや農業経営のための勉強会は，家庭における金銭の収支を知り，よりよい農業経営の方策を考える契機となっていった．農村の女性をターゲットにした社会教育や普及事業によって，彼女たちは「考える」労働者へと変貌しようとしていったといえよう．

家事労働者を孤立させ，自律性のない多忙な労働に従事させる封建的な村社会が高度経済成長期には多くみられた．しかし，女性たちが家事労働の合間に書くことを通して作られていった生活記録によって，家事労働者たちは家庭や地域社会を客観視する目を養っていった．生活記録は，批判を受けながらも各地域に広がっていくことになる．

4. 結論

農村の人々が生活記録を書き・読む過程で，自分達の「生活」や生活を取り巻く世間を見つめ直し，自分たちで解決の方向性を導き出そうとしたことに生活記録の一つの意義がある．農作業や家事労働に明け暮れ，ラジオを聴くこともままならず都会の「文化的」な生活から離れていても，貴重な時間を削って文章を書こうあるいは読もうとした多くの女性たちの熱意を忘れてはならない．彼女たちの連帯を意図した知識人たちの存在はもちろん大きい．しかし筆者である農家女性の意図（書く喜び）と編集者の意図（農村の変革）とは立場や生活状況の違いから微妙にズレながらも,「文化」から遠い者たちの「読み書きの共同体」が形成され，農民が農村を変える契機となりつつあった媒体の一つが生活記録だったのである．

参考・引用文献

天野正子・木村涼子編 2003『ジェンダーで学ぶ教育』世界思想社
天野正子 2005『「つきあい」の戦後史』吉川弘文館
家の光協会出版部編 1967『喜びも悲しみも　主婦の生活記録』家の光協会
北河賢三 2014『戦後史のなかの生活記録運動』岩波書店
増田仁 2014『高度経済成長期における家事労働者形成過程の再検討』風間書房
丸岡秀子編 1958『明日を叫ぶ母の声―熊本の母の生活記録―』東洋館出版社
丸岡秀子編 1969『村づくり二十年』理論社
M. セルトー（山田登世子訳）1980＝1987『日常的実践のポイエティーク』国文社
水溜真由美 2013『『サークル村』と森崎和江』ナカニシヤ出版
西川祐子 2012「サークル運動再考」安田常雄編『社会を問う人々』岩波書店，pp.53-81
及川和浩 1963『嫁と姑』未来社
大門正克 2012「「生活」「いのち」「生存」をめぐる運動」安田常雄編『社会を問う人々』岩波書店，pp.168-196
大金義昭 2005『風のなかのアリア』ドメス出版
思想の科学研究会編 1976『共同研究　集団』平凡社
全国農協婦人組織協議会 1965『農村婦人の生活記録』

本研究は JSPS 科研費 JP16K02040 の助成を受けたものである．